



### 中国がわかるシリーズ 29 唐の衰亡(後)

ライフネット生命保険株式会社  
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

唐の衰退を見て、日本は 894 年、菅原道真の建議によって遣唐使を停止しました。600 年の遣隋使から約 300 年間、曲がりなりにも、日本と中国との間で、正式に国交が維持されていたことの影響は極めて大きいものがあります(もともと、合計 20 回の派遣の中で、唐より遣使が訪れたのは、わずか 3 回に過ぎませんが、これは、天皇が正式に冊封されていなかったためでしょう)。

わが国に対する中国の影響は、唐代に起源を持つものが他を圧倒しています。遣唐使を通じて、膨大な漢籍や仏典が、わが国にもたらされたことと相俟って、漢字の発音の殆どが唐音であることが、その一例です(わが国に帰化した袁晋卿＝清村宿禰の貢献が大きいものと思われます。遣唐使は、ブックロードでもあった、という人もいます)。

また、喫茶の風習も、遣唐使が持ち帰ったものです。この頃、日本では、藤原氏が外戚として専断を奮う摂関政治(体制)が確立していました(866 年、藤原良房が皇族以外で初めて摂政に就任。888 年には、良房の養子、基経が初めて関白に就任)。平清盛まで、日本の中央政府と中国政府との間は、没交渉になります(民間ベースでの交流は一貫して拡大し続けましたが)。

晩唐には、優れた詩人、李商隠が生まれました。905 年、沙陀族のリーダー、李克用(独眼竜と号した。因みに、伊達政宗は、頼山陽の漢詩によって李克用の号を得た)と、モンゴル系キタイ(契丹)連合のリーダーとなりつつあった耶律阿保機が雲州(大同)で会盟し、兄弟(年長の李克用が兄)の約を交わしました。軍事同盟こそありませんでしたが、10 世紀の中国をリードする、キタイと沙陀の歴史的な邂逅(かいこう)でした。